

醕

〔日本書紀神代〕一書曰、中略神吾用鹿葦津姬、以ウラヘ卜定田號曰狹名田、以其田稻釀天甜酒カムサケ嘗之、

〔倭名類聚抄十六〕醕唐韻云、醕音離、和名之流、酒薄也、

〔東雅十二〕酒略又中略名抄唐韻を引て、醕はシル、一つにモソロといふ、酒薄也、と注せり、モソロの義

不詳、今ミソレといふ酒、その遺製なるに似たり、

〔倭訓栞前編三十三〕もそろ 倭名抄に醕をよめり、又しるともいへり、酒薄也と注す今の俗いふ

所の辛口なるべし、或はみぞれと音通ず、今も酒にみぞれといふ、是にやといへるはあたらす、

醇酒

〔新撰字鏡〕醕女容反、平、厚酒也、加良支酒、

〔倭名類聚抄十六〕醇酒唐韻云、醇音淳、日本紀私記云、淳酒加太佐介、厚酒也、

〔箋注倭名類聚抄四〕酒按加太佐計、堅酒也、堅猶言厚也、與訓醕爲加太賀由之加太同也、蓋謂濁酒

之厚者、然則不得以此訓清酒之醇也、

〔日本書紀七〕十二年十二月丁酉、議討熊襲中略天皇則通市乾鹿文而陽寵、時市乾鹿文奏于天皇

曰、無愁熊襲之不服、妾有良謀、即令從一二兵於己、而返家以多設醇酒カラサケ令飲己父、乃醉而寢之、市乾鹿

文密斷父弦、爰從兵一人進殺熊襲梟帥、

〔續修東大寺正倉院文書後集三十七〕符 山作領玉作子綿等所中略

一雇工雇夫等酒給法 更不云司工并仕丁等

右辛酒一升買、水四合和合、二箇日間一度給、人別三合中略

以前條事至承知狀、火急施行、不得怠緩、故符、

主典安都宿禰

下

天平寶字六年正月廿四日